

第2回つながろう CO・OP アクション交流会に参加して

組合員活動委員 杉本 節子

陽気が緩み始めた3月中旬、日生協主催の「つながろう COOP アクション交流会」に参加しました。

全体会でのコープふくしま野中専務の話が心に残ります。放射能による外部被ばくに怯えながらの暮らし、ホールボディカウンターでの内部被ばく検査があたりまえに行われている現実。自宅に帰る、その展望さえ持てず住民は苦しんでいる。これは憲法13条の幸福追求権の侵害ではないかと彼は語尾を強めました。こういう状況を理解したうえで「何とかしたい!」と全国の生協から、どこよりも早く、そして今日までずっと支援を続けてくれていることに感謝しこれからも福島の農産品などを利用してほしい。それが一番の支援ですといいました。

2日目はバスで福島沿岸部から宮城県沿岸部を車中視察しました。原発事故の影響で復興どころか復旧も遅れている南相馬市や小高町では人気のない町に身を寄せるサルの群れを見ました。

震災から2年が経ち「きずな」がうまれる反面、賠償問題や考え方の違いから溝が生まれてきました。ある仮設住宅ではフェンスを立て言葉も交わさない、行き来もしなくなりコミュニティが難しくなったといいます。震災直後のこんな話も聞きました。農家の方が黙々と種まきや果樹の剪定をしている姿を見て、住民たちから「みんなが苦しんでいるときに何だ!」と非難の声が浴びせられたとき「生きるためには食わねばならない。札束を食べても生きられない」と言葉を返したといいます。力強い言葉です。

バスは宮城県に入っていきます。名取市閑上地域はほぼ壊滅状態です。何も無いところに乾いた風が吹いています。約6000人いた住民のうち1000人もの人が津波で亡くなりました。小さな丘程度の日和山に逃げて助かった人もいましたが、眼下で流されていく家や人々をどんな思いで見いていたのでしょうか。胸がつまります。数珠を手にも祈っているときにドヤドヤとバスで来て写真を撮る一行が・・・(何だ、この人たちは・・・)と思いますが被災者からみれば視察も観光?も同じに映ります。多くの犠牲を生んだ大地にシャッターは押せなくなりました。バスに同乗しガイドをしてくれた理事さんが「よく言われるんですよ。意外にも皆さん 明るいですねって。ただ現実を受け止めるのに明るいも暗いも同じなだけですから・・・」とおっしゃったのが印象的でした。

さまざまな喪失感を抱え、今もなお、もがき苦しんでいる人々がいることに 私たちはもっと真摯に向き合わなければなりません。甚大な被害を受けた東北地方を忘れることなく、できる支援をつなげていく努力と意識が必要です。浜松の自宅を出てわずか3時間ちょっとで着き、遠くて近い福島ですが被災者の心にはまだまだ遠い”ふくしま “だと実感した視察でした。



人気のないお菓子屋さん、「小高区民と共に復活!」の幟が印象的でした。